

「3.15 治安維持法大弾圧事件 96周年の集い」を開催

3月24日、コロナ渦を経て4年ぶりに「3.15 治安維持法大弾圧事件96周年の集い」を開催しました。会場の高教組センターホールには座席が埋まる100余名の人々が参加しました。市立小樽文学館の龜井志乃館長の講演と映画「蟹工船」が上映され1928年3月15日の大弾圧に抗し平和を求める新たな決意を呼び起こす集会になりました。

**侵略戦争反対、男女平等、主権在民、
私たちは今もこの旗を**

決して降ろさない！

歌代道本部会長

開会あいさつ

「3・15、96周年の集い」にご参加のみなさんご苦労様です。

1928年3月15日は、治安維持法大弾圧があり全国で1600余名が検挙された日です。弾圧にあった人たちは何を政府に要求していたのでしょうか、侵略戦争反対、男女平等、主権在民、そういう旗を掲げて闘つて、多くの人が被害に遭い犠牲になり殺されたわけです。その闘いのどこが悪かったのでしょうか。戦後その闘いの成果は、憲法に書かれました。

彼らの闘いがあつて今の私たちの生活があると思います。今日は映画と講演から彼らが何をめざしていたのか、再度、深く深くかみしめる機会にしたいと思います。

時あたかも大軍拡と大増税の様子がうかがえます。私たちはこの機会をもとに自分たちがどう生きたらよいのか、何ができるのかということを深く深く学び合いたいと思います。

今日は本当に満席に近い状態で大変うれしく思っています。最後までよろしくお願いします。(拍手)



(598号付録)
北海道版 No.496

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
北海道本部

編集発行人 歌代 英藏
〒065-0018 札幌市東区北18条
東15丁目3-6ブランノワールF101号
電話 011 (374) 8280
FAX 011 (374) 8281
郵便振替・02740-7-24209

「会員・国賠署名拡大特別期間」(3月～6月全国大会まで)の設定

会員1300名、国賠署名12000筆の目標をやりあげよう!

3月21日、道本部では3役会議

を開催しました。3月14、15日に開催された中央理事会の決定、「4月～6月拡大特別期間」を受け止め、北海道の拡大目標達成のために運動をどう進めるべきかを議論し、「北海道独自の特別期間(3月から6月全国大会まで)」を設け、運動成功のため支部のみなさんと意思統一をはかり大前進していくことを方針にしました。そのためにも支部活動の現状を把握することに努め、本部役員が先頭に立ち運動を牽引する役割を担うと決意し、役員全員が顕彰活動挑戦者になることにしました。また役員それぞれが担当支部を持ち、日常的に共に支部との連携を強めていく体制も確認しました。

北海道の12支部では各地域で日夜奮闘し草の根の運動を続けています。

☆札幌支部は、各団体と共同する

運動の中で署名活動の取り組みを進め、各種集会の場で広げています。

☆江別支部は、役員会で特別期間の取り組みについて議論し、積極的に取り組みを進めていこうと思え统一。役員中心に行動しました。

☆南空知支部は、「不届」南空知版で全会員に会員と署名拡大の率直な訴えを行ない前進させています。

☆苦小牧支部は、いち早く5月15日の国会請願代表を決め、何としても署名の目標をやりあげ代表に託す決意で取り組んでいます。

☆釧路支部は、2人の新しい仲間を迎え、署名の目標を据えて奮闘しています。

☆室蘭支部は、畠山副会長の援助のもと「千代子映画」上映運動の中心となつて頑張っているSさんが入会した契機に支部活動

に弾みをつけ、署名活動も頑張っています。

☆小樽支部は、定期的に役員会を開催し全会員の団結を図る行事などに取り組み、署名を増やしています。

☆十勝支部は、地元民衆史の掘り起こしを行いその歴史からを学ぼうと取り組んでいます。

☆道南支部は、支部長中心に、議員のみなさんに依拠した活動が、知内、七飯町などに拡がっています。

☆北見支部は、全会員に「一人5筆、10筆の署名運動を」と訴え、署名目標の半数超える数に到達しています。国会請願代表も2名決めました。

☆道北支部、北空知支部は、本部役員の協力のもと困難を克服しようと努力しています。

6月の全国大会まで

不届4月号「お詫びと訂正」
「不届」道版3月号、事務局だよりの文章「先んじて南空知支部、北見支部、道南支部、札幌支部は、支部発行の不届で特別期間を積極的に受けとめ、会員みなさんに積極的な活動参加を訴えています」を取り消し、「先んじて南空知支部、北見支部、道南支部、札幌支部は、支部発行の不届で国賠署名の前進を全会員に訴え成果につなげています」に訂正しお詫びします。
事務局長 横山博士

の「拡大特別期間」を全会員の参考まで新しい歴史を作つていこうではありませんか。

亀井館長講演(要約)

小林多喜二と『蟹工船』『工場細胞』

「3・15、96周年の集い」で市立小樽文学館亀井館長が映画『蟹工船』上映前に講演しました。紙面の関係もあり、講演内容を要約して掲載します。

小林多喜二と

『蟹工船』、『工場細胞』

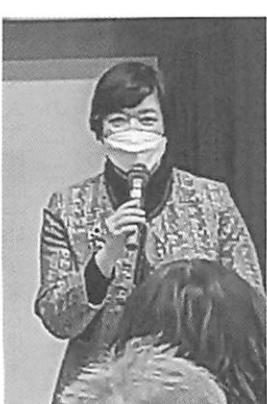
今日は、小林多喜二の『蟹工船』と『工場細胞』の作品のアウトラン、注目点、作品を書いたバックグラウンドと思われることをお話しさせて頂きます。

まず、『蟹工船』ですが雑誌『戦旗』に昭和4年、1929年の5月6月に発表されました。大弾圧をテーマにした「1928年3月15日」が発表された半年後になります。蟹工船とは、カムチャッカに出漁する母船に小型漁船を運行し、小型漁船が操業してきたカニを集めそれを母船内で即、缶詰にする當時は非常に新しい加工船のことです。日本ではもちろん海外にも多く輸出され評判もよく、売れたのでいい儲けになると注目されました。問題なのは、加工する工場を兼ねる蟹工船は、当時の工場法適応から免れていた事です。多喜二が作品を書くにあたり作つて、ノートから読み取れることは、密漁というか、ひどくナーバスごとでしたが、北洋の公海でやるた

め船出も曖昧だったとあります。つまり儲かる割にはゆるゆるの操業ができたのです。労働者も漁でなく加工に従事する役割で雇われ、それも海員法も適用されず法律の網がかからないわけです。蟹工船は一年間4、50万円の手取りは確実だと多喜二が書いています。当時の50万円は、ざくっと3億円ほどになりそれは魅力的であったわけです。ノートには大正13年は7隻ほどの蟹工船が、翌年14年に9隻になり15年に12隻になりましたとあります。多喜二が書き始めた昭和の初期には33隻の新規出願がありバンバン蟹工船が増えていました。法律の網にかられない、加工船だからとボロ船でもよい、加工が出来るしつらいさえあればよいと劣悪な環境になり、人夫も労働の劣悪さに判断が効かない農家の人が炭鉱よりよい働きと集め、ブラック企業のような状況下で働くこと、亡くなる事件が起り調査しています。産業労働

さんという多喜二の小樽高商の同期生がいて直接話しを聞き外在を取りて書かれたのが『蟹工船』です。この作品は、漁夫や若い札夫とかが労働争を経験したことから革命が起る、未来が来るぞという未来に希望をもたせる未来小説という形になっています。

多喜二是蟹工船を書いたその翌年に雑誌『改造』に『工場細胞』という作品を書きます。これは北海製罐工場が舞台で『蟹工船』と同じ関わりがあるか、この話は、舞台は違えども『蟹工船』の姉妹編といえます。多喜二是この作品を書いたとき『改造』編集者宛てに書いています。「私は何よりこの作の中で最も資本主義化された近代の工場を取り扱った」と。ベルトコンベア、オートメーション化で大量生産方式を用いる最先端の工場が北海製罐です。残酷な搾取をもつた鉄工場式で描かれる作品が多い中、多喜二是そうではなく、極めて近代的な工場の中に共産党の細胞が入ることを書いたのです。『工場細胞』の視点は從来の作品にはない新しいものでした。今の工場はここまで来ている、そこにどう入り、そこに組合員をどう構成するのかを書こうとしていたのです。非常に合理的だが、



(文責

河野)

理化のために首も切られるのだということを描こうとしたんです。多喜二が物の生産とか、工場システムをきちんと書こうとしたばかりが労働争を経験したことから革命が起る、未来が来るぞという未来に希望をもたせる工場は学校が建て、仕入れ、製造、市場調査、労務管理、原価計算も教官の指導の下で一切学生がやるのである。大正10年から始めた3年生対象の授業なので、多喜二も3年生の時受けたはずです。シンプルながら企業経営のあり方をまるごと学んだことで、多喜二も3年生の時受けたたって発想とか、からくりとか分かった上で考えなければいけない人よりも、経営する側の目線にかかるの労働問題は、働くされたつて発想とか、からくりとか分かって、多喜二は持っていたという視点を多喜二は持っていた人といえます。そういうところから出進して『蟹工船』を書き、続編である『工場細胞』を書いたところです。ありがとうございました。

北の語り部

戦争をのりこえた人生と、 戦争危機の今をどう生きるか(2)

江別市での講演から

治安維持法・国賠同盟苦小牧支部長 畠山 忠弘

赤井川中学校卒業から5年間は、家の開拓農業を手伝い、義弟が義務教育を終えたのを機会に、昭和33年・勤医協黒松内診療所へ事務員として就職。まだ国民皆保険前の時期で、町民の医療費は付けがおおく、経営も大変でしたが山辺富也先生を先頭に頑張りました。昭和36年には日高管内浦河診療所への転勤となりました。

浦河に移って1年足らずで党日高地区委員会から党の専従になるよう要請を受け、社会変革の新しい任務に就いたのが昭和37年(1962年)25歳の時でした。

任地は浦河、静内、室蘭と移り、さらに苦小牧に派遣されたのが、昭和46年(1971年)田中角栄内閣が「日本列島改造論」を打ち出し、最大の目玉として「苦小牧東部開発計画」が閣議決定された年でした。

東部開発計画が押し寄せてきた

苦小牧市は製紙産業のまちから、鉄鋼や石油精製、自動車一貫生産を目指す巨大産業の建設、すでにあつた西港の他に東部開発計画に対応した巨大港湾の「東港」を建設するという内容です。人口30万人都市を作るという途方もない計画を推進しました。

全道・全国から「苦小牧に行けば何とかなる」との宣伝にのつて人口は膨れ上がり、東部地区の開拓農民は、苦労して開墾した土地を手ばなし、次々と離農していくのです。

ところが鳴り物入りの宣伝と裏腹に企業の進出は進まず、土地成金は増えましたが、地価や家賃の高騰、全道一のマンモス校舎の出現、14階建ての巨大公営住宅・集中暖房の建設で地元建築業者は手も足も出ず日本を代表する建設業者が受注ました。東に工業基地、西に居住地のすみわけから朝夕の周辺にはサラ金が店をならべ、その被害は膨大になりました。

このような状況から、46年「大企業本位の東部開発反対共闘会議」が発足、「公立高校建設を進めめる会」の結成と署名運動の発展、昭和55年には「生活と健康を守る会」再建。「建設厚生組合」の発足、56年には「勤医協苦小牧病院」の開院などが相次ぎ、市民のたたかいがすすみました。

3、苦小牧市議会へ

この時期に私は市議会選挙に押され、昭和58年に当選し、以来20年間議員を務めることになりました。切実な市民要求を背負つて必死でたたかいました。最大のたたかいは、国家プロジェクト「苦小牧東部開発」でしたが、オイルショックもあり、企業の進出が少なくて、土地が売れず、第3セクターの「苦東開発会社」が倒産し計画が破綻しました。しかし、工業用

交通渋滞が発生、公害の多発など一般庶民の生活は大変でした。その結果、全国有数の自殺急増地帯となり、離婚率が急増、JR駅前からつぎと持ち込まれました。洪水の時だけ泥水を太平洋に流す「千歳川放水路」建設計画や原合実験炉誘致計画などが持ち込まれ、徹底的に対決し市民と共同して阻止したのです。全国一のホッキ貝漁場は守られ、「ホッキ祭り」は2万人が集まる一大イベントになつたのです。また、北海道唯一の「非核平和都市条例」が2002年4月に制定されたのです。こうした成果のかけには、共産党市議団が5人(当時の定数36人)に躍進したことが市民のたたかいと共に前進したのでした。そして2002年2月、東京の藤田廣登氏からの依頼によって、探索を始めた「伊藤千代子獄中最後の手紙」が市立中央図書館でついに発見されたのです。(つづく)

